慶應義塾大学ビジネス・スクール

レリアン株式会社

—1984年の小林栄子—

ライトが消え、場内は静まり返った。「発表します。昭和59年度最優秀賞は…！」営業本部長の西原が大きく息を吸い込み、一気に読み上げた。「熊本岩田屋伊勢丹店！」場内に「ひゃあっ」という悲鳴が上がり、スポットライトの当たった店長は両手で顔を覆いながら泣き出した。彼女が壇上で賞状と商品を手渡されたその瞬間、高らかに流れるファンファーレのボリュームは最大に上がり、割れんばかりの拍手が会場に鳴り響いた。

商品開発責任者である小林栄子の率いる婦人服販売会社「レリアン」では、このセレモニーが毎年繰り返されていた。それは社員達の日頃の成果の結集であった。 当時の低迷する業界にあって創業以来発展拡大を続け、“専門店の奇跡”とまで言われたレリアンの快進撃にはどのような仕組みが働いていたのだろうか。

会社沿革

レリアンは、1968年（昭和43年）4月、レナウンを筆頭に伊藤忠商事と三菱レイヨンの共同出資によって設立された婦人服既製服の販売会社であった。 レリアンには、婦人服販売の他にバラの生花販売、加工食品の製造・販売、不動産事業部門（昭和59年別会社からの合併）があったが、主力は婦人服販売であった。

これら婦人服は、レリアン本社内にある商品企画室でそのほとんどが企画され、4、5社の取引先メーカーに発注・製造されるという、いわばマスプロ標準品の形態をとっていた。

1984年（昭和59年）度決算では、総売上高は389億円（前期比11.4%増）、経常利益も前期比57.6%増の増収増益を計上した。 ＜付属資料１＞　この中で、婦人服販売はレリアンの総売上の約93%を占め、金額にして362億円（'84年実績、前期比17.8%増）、経常利益31億5,570万円（同年実績、前期比53.3%増）と好業績を挙げていた。 創業以来赤字決算は初年度のみであり、低迷する業界にあって発展拡大の一途をたどるレリアンは、“専門店の奇跡”とま

このケースは、公開情報をもとにして、クラス討議の資料として用いるために作成した。

著作権 © 1998は慶應義塾大学ビジネス・スクールに所属する。